

被災地の課題に向き合い 住まいとコミュニティづくりを支援

Efforts of Enterprises  The future of Tohoku

大和ハウス工業株式会社



気仙沼女子高等学校跡地の高台に建設された復興公営住宅「気仙沼市営魚町入沢住宅」。専用通路やエレベーターなど設計の工夫で、高低差が大きい敷地に建つ4棟の集合住宅と立体駐車場のアクセスをスムーズにし、バリアフリー化を実現。内湾地区の新しいシンボルとなっています

仮設住宅や復興公営住宅の建設などで、早期の生活再建に貢献してきた大和ハウスグループ。地域と共に課題に取り組み、コミュニティづくりを支援するなど、被災地の力になってきました。東日本大震災の経験を生かし、さまざまな災害の復興支援や安全・安心な住環境の実現に取り組んでいます。

東日本大震災では津波などの被害により、多くの方が住まいを失いました。大和ハウスグループは、被災地の一刻も早い生活再建のため、住環境の整備に尽力。震災8日後には、いち早く応急仮設住宅の建設に着手し、2011年9月末までに1万1041戸の仮設住宅を建設しました。

全社で復興支援に取り組むという方針のもと、全国から人とモノを集中。復興需要でコンクリートなどの資材や人手が不足する状況下で、同社の強みである軽量鉄骨プレハブ造により、復興公営住宅の早期完成に貢献しました。東北地区において、民間企業最多の3000戸以上の復興公営住宅を建設しています。

多くの復興公営住宅を建設する中で、住民の孤立を防ぐための取り組みにも力を入れてきました。例えば、住居の南側に通路や路地空間を設け、部屋の中にも人々の気配や暮らしを感じられる「リビングアクセス型」の設計を取り入れるなど、住民同士の交流が生まれやすい環境づくりを工夫。さらに、建物の建設にとどまらず、コミュニティ支援も積極的に実施。復興公営住宅の入居者と地域をつなぐための「餅まき会」や共同菜園を通じた交流会などを企画し、そこに住まう人々の暮らしの再生を応援してきました。

住民の孤立を防ぐ
復興公営住宅へ



コミュニティセンターで毎週開催されるクラフト教室は、毎回多くの参加者でにぎわっています

被災地の課題に
企業の総合力で挑む

復興公営住宅の建設においては、被災地が抱える課題やニーズに真摯に向き合いながら、地域と共に住環境の整備を進めてきました。

その代表的な事例の一つが、

16年に着工、17年に引き渡しを行った「気仙沼市営魚町入沢住宅」です。気仙沼女子高等学校の跡地の高台に建つこの公営住宅の工事は、非常に困難なものでした。20メートル強もの高低差のある現場と周辺の狭い道路。さらに、高台での慎重な解体工事、高低差を解消するバリアフリー動線の実現、地域の避難機能確保など、多くの課題が待ち受けていました。

そうした条件下で、設計の工夫や技術力で、高低差のある敷地に建つ4棟の集合住宅と立体駐車場の車いすでスムーズに行き来できるバリアフリー化を実現。「コミュニティセンター」がある棟と他の棟を専用通路でつなぐ工事は、住民のコミュニティをつなぐ思いでした。延べ2000人も職人を束ねる難易度の高い工事でしたが、住民の方に喜んでいただき、やりがいがあり「た」と仕事を担当した三島寛さんは話す。

この住宅に住む自治会長の吉田道郎さんは、「被災して、仮設住宅などに住んでいたが、以前のよう



気仙沼市営魚町入沢住宅に入居する皆さん。2号棟1階のコミュニティセンターでは定期的「お茶会」が開催されるなど、住民同士の交流が盛んです

よく、一番人気と聞いていますよ」と笑顔で話してくれました。住民の方は集会所で定期的にお茶会を開くなど、交流を楽しんでいるそうです。

東日本大震災の体験を
各地の災害支援に生かす

魚町入沢住宅の早期完成には、気仙沼女子高の校舎の撤去、造成から建設まで、大和ハウス工業が一括して請け負ったことが寄与しています。仙台支社のスタッフと共に復興支援室や都市開発など、多くの分野のスタッフの力が結集されました。また、計画段階から地域の方とコミュニケーションを取りながら、まちにふさわしい建物づくりを進めたことも特徴の一つで、気仙沼市・内湾地区の新たなシンボルとなりました。

 Daiwa House®

大和ハウスグループのSDGs
<https://www.daiwahouse.com/sustainable/sdgs/>

